新「共通特論Ⅱ」：臨床腫瘍学各論

悪性リンパ腫の分類と治療

講義日：2022 年 10 月 8 日（土）

講師：日野　雅之（大阪市立大学　血液腫瘍制御学 教授）

要旨

我が国の悪性リンパ腫の頻度はＢ細胞リンパ腫約 70%、T/NK 細胞リンパ腫約 20%、ホジキンリンパ腫約 6%で、九州、沖縄で ATL が多い。悪性リンパ腫の症状はリンパ節腫大、圧迫症状、B 症状（体重減少、発熱、寝汗）がある。リンパ節が腫大した場合、多くはウイルス感染などによる一過性であるため、4 週間程度経過を診て、軽快しない場合に診断のために生検を行う。濾胞性リンパ腫は、病状によってはウォッチフル・ウエイトが選択肢となりうる。抗 CD20 抗体であるリツキシマブの開発はＢ細胞リンパ腫の予後を改善させた。初回投与時のインフュージョンリアクション、B 型肝炎の再活性化など注意が必要である。びまん性大細胞型Ｂ細胞リンパ腫の標準治療は R-CHOP で治療強度 RDI が重要である。胃 MALT リンパ腫はヘリコバクタ・ピロリ菌が関与しており、除菌により縮小する場合がある。抗 CD30 抗体薬ブレンツキシマブ・ベドチンはホジキンリンパ腫、未分化大細胞リンパ腫に効果がある。さらに、多くの分子標的薬、抗体医薬、CAR-T 細胞療法などが開発されている。